

ビブリア

NO.1

発行 いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
編集 図書委員会
昭和46年6月26日

ビブリアの発刊にあたって

芋川平一

1. 感覚の次元から思考の次元へ

世をあげてフィーリングの時代とかで、思考力の偉大さよりも、感覚や感受性の新らしさを誇っているようにみえる。しかしこの流行は、多分にマス・コミ特有の“新らしがり”が、物事の現象面を過大に評価しハヤシ立てた結果であって、現代人の感覚が根本的に変わったとも思えないのである。たしかに、テレビ時代に育った世代は、昔の人間に較べて、感性面・感覚面における反応は素早い。しかし、その反応をどの方向にむけて集約していくか、自分ひとりの生き方にどのように関係づけていくか、という点になると、感覚の新らしきだけではどうにも処理しきれなくなるのである。そこで、あらためて“人生観”なり“世界観”なり定められ、“生きがい”が論じられることになる。最近の生きがい論ブームは、そのことの象徴とみる事ができる。

また、人それぞれの自由な生き方が可能な現代において、そして自由ということが、実は本質的にある制約（主体的・客体的諸条件）の下における自由であるということによって生じる困難さを、いかに克服するかという問題が、これらのブームの背後には存在しているのである。

大それた夢なり希望なりを持たなければ、何とか生きていけるという平和な日本において、若者たちの一部に“三無主義”が根をおろしているのも判らないことはない。しかし、その生き方は、自由な社会において、その自由によって途迷っている状態であり、人間性（人間をして人間たらしめている条件）の自己放棄といえないだろうか。われわれは、人間失格を意味するこのような退廃に陥らないために、たえず自からを律し、自からの思考力を鍛えておかななくてはならない。

2. ビブリアのねらい

ところで、毎日おびただしく生産され伝達されるマ

ス・コミ文化のなかから、何を選択し、何をもって精神の糧とすれば良いのか、途迷っている諸君もいることであろう。

また、高専へ入学して、学習内容の変化・高度化に途迷っている下級生諸君もいるかも知れない。

そのような諸君たちに、高専生として求められている知的水準を示し、また、その水準へ到達するための手がかりを与えようというのが、ほかならぬビブリア（ラテン語で「本」という意味）発刊の意図である。これまでも「学園通信」紙上において、折にふれて読書案内が行なわれてきた。それをもっと系統的・本格的に行ないたいというのが、われわれの希望である。幸いに学生の図書委員の諸君もいることゆえ、ともに手を取りあって、生々とした未来を予知させる知的《饗宴》の場を作りだしていきたいと思っている。

3. 複写サービスについて提案

すでに「学園通信」（13号）で報道されたように、このたび図書館に電子複写装置を備え、学生諸君の要望に応えることになった。しかし、用紙をどう扱えば良いかが未解決のままなのである。学生諸君がひとりひとり“百枚入り一袋”の感光紙を買って持っていれば問題はないのであるが、有効期限が約6ヶ月の用紙を無駄にするおそれも多分にある。それゆえ、グループで一袋買うか、学生会か学生図書委員会あたりが販売するか（その場合、販売場所・時間・経費・人手をどうするか）、などいろいろな事が考えられる。

無駄が少なく能率も良い方法は何か、この際ひとつ諸君たちが知恵をだしあって、学生図書委員を通じて6月末頃までに申出て欲しい。切角の装置も、この問題が解決しない限り、宝の持腐れになってしまうのである。感光紙さえ持っていけば、複写装置はいつでも作動できる状態になっているのである。

（倫哲・独語科）

国語と読書

国語科 生田 勝彦

昭和5年に春陽堂から明治大正文学全集が出た。今手元にはないが、その中の「吾輩は猫である」には苦い思い出がある。小学校上級学年の教材だったと記憶するが、〈猫の踊り〉に抱腹させられ、すぐに上記の本を借りてきた。ところが、漢字のむずかしもさることながら、用語の難解さに辟易し、数頁で降参した。兄からお下りの新字鑑もすっかり萎えた。中学になって友人が傑作と称するので、心中何を小癪など挑戦したがあえなく上巻でダウン。木登りはできなかった。それでも面白い所には線を引きその友人に迎合してやると、彼は頗る機嫌よく的はずれに肯いてくれた。その後も、良薬は口に苦しと観念して再三苦汁を飲んだ結果、高校生になってまもなく読み終えた。面白さが解ると幾度も読み、その都度傍線や書き込みをする。その箇所は変わっていくが自分の成長を見るようで楽しい。人生に資するところ大なる作品ではないが、私は〈猫〉によってストレス解消を図っている。漱石先生まことに不肖の弟子を持ち給うたものだ。でも酒脱な方だから「道草」を食いながらも人生の「明暗」まで辿り究めよと叱正されると思う。

私の中学高校時代は、まだ敗戦後の物資不足が尾を引き、文学書の体系的な出版はあまりなされていなかった。したがって私は、親戚の中でも戦火を被らなかった家の蔵書に頼るしかなかった。ところが全集の完備している家などある筈もなく、古ぼけた何冊かの単行本を手あたり次第に読んでいった。処々に伏せ字があった。墨で塗り潰されている箇所もあった。その頃は国民全体が活字に飢えていたのであろう。図書館でさえ戦火のために本を揃えられなかったせいもあってか、読みたい本はいつでも借りだされていた。こんな状態であったので、私の読書量はその年頃にしては、ひいき目に見ても多いといえなかったし、方法も体系的でなかった。それでも今なお記憶に新たな書物といえば、日本文学の中では、中学時代の「次郎物語」「一握の砂」、高校時代の「徒然草」「竹沢先生という人」「青銅の基督」「天の夕顔」「破戒」などを挙げられる。いずれについても手まめに感想文を書いておいたことが今なお記憶に残る所以であらう。感想文を書いたということは、それだけ真剣に読んだことを示すものであるが、書物の入手が思うにまかせぬことの

なせぬわざでもあった。それらの感想文は、今から見れば読みの浅さを物語る誤解もあり拙劣である。しかし、優れた文学書は繰り返し読んでも感想文を書いて、尽きぬ魅力と価値を持っているものである。

国語の力は読書量によって決まり、読書量のいかにあらかゆる教科に影響をもたらすとはよく説かれることである。ここでいう量とは質をも備えたものであることは論をまたない。活字公害が叫ばれる今日、モラルの変遷・読者の年齢とか境遇及び教養のほどを考慮に入れると、何を以て良書とするかは一様でない。しかし、その時点で直接役立たなくとも読んでおいた方がよい一往の基準ともいふべき書物はある。それらは国語の場合でいうなら、人間の生き方に触れ、しかも時間空間を超えて定評を得ている文学書である。これらにはいづれも作者の誠意が窺われ、人生いかに生きべきかの問題に示唆を与えられるところがある。このような書物こそ味読するにふさわしいものである。古典にしても近代文学の中でも高い評価を得ている作品は枚挙に暇がない。単に〈ベスト・セラー〉などと宣伝されたものを読み漁る者は、企業にとっては、まさに利潤追求のこよなき協力者となる。それらの書物は、はたして時代を超えて残るかどうか甚だ疑問である。

数学の参考書

数学科 佐伯 伸雄

勉強の目的によって、参考書の選び方もちがってくるが、次の4つの場合に分けて参考書をあげてみよう。

- (1) 授業に直接関係のあるもの
- (2) いわゆる新しい数学
- (3) 数学の各部門の解説
- (4) 数学史

(1) 教科書の内容と程度に相当する参考書一冊を座右において、復習の際に利用するようにしたい。新しい本を買って第1頁から読み出すというのは、なかなか根気のいるものである。むしろ、教室で習った箇所と同じところを、参考書ではどのように説明してあるかを調べてみるようにしてはどうであろうか。

1年生向きとして、例えば

矢野健太郎著 代数入門 岩波全書

・説明がわかり易く、演習問題もついている。

2年生の微分積分の参考書は沢山あって選択にこまる位である。英語の辞典のように、机上において、

手軽に利用できるものがよいとおもう。例えば

河野伊三郎著 微積分入門 岩波全書

更にもっと詳しく研究したい者は、微積分学という名前のついた本を読破することが望ましい。それによって、専門科目を学ぶ上の基礎ができるとおもう。

(2) 最近になって、新しい数学という名の数学書が盛に出版されている。学生ばかりでなく、一般社会人向けの数学解説書もたくさんある。小学校、中学校の数学の内容も改訂された。数学的な考えが、自然科学、社会科学を問わず、あらゆる分野に応用されるようになった。何か1冊ぐらいいは読んで、数学の新しい展開にふれてみることをすすめる。学校で習うのは基礎である。学問は不断に進歩している。積極的に、新しい知識を研究する意欲がほしい。2冊だけあげておこう。

矢野健太郎著 新しい数学 岩波新書

松坂和夫著 集合・位相入門 岩波書店 950

(3) 一口に数学といっても、内容は多彩である。実に多くの部門と、研究テーマがある。技術の研究は当然、数学の応用を伴う。研究が深まるにつれて、技術の原理と数学の構造が接近してくるであろう。技術に関係のある数学を、数学の立場から研究してみることも必要である。

次のような本がある。

ウスベンスキー著 数学新書

清原岑夫訳 力学の数学への応用

東京図書 230円

アレクサンドロフ著 群論入門

宮本敏雄訳 東京図書 420円

渡辺秀明著 芸術と数学 森北出版

(4) 数学とは何であるを一言でいうことはむずかしい。数学は、人間精神の自由で創造的な活動の歴史的所産である。普通の数学の教科書は、論理的に書いてはあるが、歴史的な発展は表面に出ていない。数学の進歩の歴史をよむことによって、数学がどのようにして生れてきたか、数学的思考とはどのようなものであるかを知るであろう。そして今後、数学は人間生活にとって、どのような意味と役割をもつものであるかの展望をうかがうことができるであろう。手頃なものとして

E.T. ベル著 数学をつくった人びと

(I~IV) 東京図書

武隅良一著 数学史 培風館

などに眼をとおすことをすすめたい。

機械と読書

機械工学科 淡路 英夫

1. はじめに

機械科に割り当てられた分は、ある先生にお願いしておりましたが、御多忙中との事で原稿のメ切に間に合わなくなり、急きよ私が、自分の非才は承知の上ながら、図書委員としての責任を感じて書いたものです。狭い視野からの作文ですのでいたずらに紙面をけがすばかりかと恐れます。

2. 下級生へ

私の昔の事を思い返してみると、私は産業革命一はなばなしく機械が登場してくるあの活気に満ちた時代の話が好きだった。フルトンの蒸気船、スチーブソンの蒸気機関車などの挿絵を今もよく覚えているしワットの蒸気機関の話を読んで、何とか作れないものかと色々工夫してみた事もある。日本では豊田佐吉が自動織機を發明していく様子の事などを夢中で読んだ。これらの話は科学物語とか学習年鑑とか伝記などに載っていたと思う。しかし同じ機械科であっても人それぞれに好みが異なり、飛行機が好きであったり、それが自動車であったり、汽車であったりするのでここでの本が良いと言うのはあまり意味のある事でない。そこで一般的な事を言う、自分の興味ある事は百科辞典なり科学年鑑なりで面倒がらずに調べてみるのがよい。調べるという習慣をつくることの大切さについては言うまでもないが、何よりも大切な事は、血のわき立つ様な感動は教科書以外のところにある事だ。教科書は平均的な事しか書いていないので、個性が強くなっていく頃には個人的に満足できない点が出てくる。そんな時により深い知識を得る事は強い感動を与えずにはおかない。百科辞典や年鑑の他、今では新書版で例えば「飛行の原理」(岩波新書)という様な本が沢山あるのでそれらを読むのも楽しい事だろう。科学者の伝記もいい。

3. 専門書の入門として

私の担当する工作法について言えば、「100万人の金属学」(アグネ)は、内容は幾分高度だが実に面白い。金属物理から工作法、鋼などの原理をわかりやすく特徴的に説明してある。「タヌキと金のタマの話」なんてあるのでドッキリしてこっそり読んでみると意外なお話だったりする。特に金属状態図、組織のわかりやすさは技群である。パーライトとかマルテンサイト

とかに頭が痛くなったら是非この本を読むべし。

4. その他

機械科の人間が機械の本ばかり読んでいっているのでは一種の思想的かたわになる。機械屋である前に人間である事を忘れてはならない。現代の技術と人間とのシステムを追求したものに「技術と人間」(中公新書)がある。少々突飛だなどと思う発想もなきにしもあらずだが新しい着眼による分析は新鮮味十分。技術論を問う本の少ない現時点では大切な本かと思う。

コンピュータとは何かという問いに直接答える本は「入門の入門コンピュータ」(日本経営出版会)である。コンピュータ用語はいたずらに面倒な言葉が多くて、用語を聞いて喰わず嫌いの人が多いが、それにソフトに答えてくれると共に、地についた未来展望をさし示してくれる。

最近のベストセラーというので読んでみたのが「東京大空襲」(岩波新書)。戦争の悲惨さを生々しく再現している。この本で訴えている事他に私の感じた事は、B29が東京の空を襲ったときの日本の技術力の醜態である。日本の飛行機は何ら反撃できなかったという事に対して技術者としての言い知れぬ屈辱を感じるのである。戦争を体験してきた技術者の中には、戦争がたまにある方が技術が進歩していいなどと言う人も中にはいるが、第2次大戦終了間際の日本と米国のこの技術の開きはどの様に受け取っているのか。その責任を取ってもらいたいものである。技術の開きの原因は明らかである。日本では金のかかる基礎研究をおざりにしておいて、外国技術の導入にばかり熱心であったが為に、技術の発展する素地を失なったからである。GNP世界第何位と騒いでいる現在でもなおさらその傾向が強まっている。今はまだ国内の労働力が安いから外国と競争できるのだが、労働賃金が国際並になった時に日本は何をもって他国と競争しようとしているのか。技術者の使命は重い。

読書について

電気工学科 渡辺喜郎

低学年における読書という内容で何か書いて下さいと依頼されて非常に困惑し、その時は、特に読書について話す資格がないと思い、再三お断りしたのですが、断り切れずに引受けてしまいました。しかし、矢張り筆を執っても仲々思うように進まず更めて、承諾したことを後悔しましたが、何等かの意味で参考になれば

と思い、私の普段考えていることを——目的から外れるかも知れませんが——書いて私の責任を果し度いと思えます。

学問の目的が人格形成にあるとするならば、その方法としての読書が唯一のものでないことは明らかです。唯読書が学問をするための最良の方法であるかのように考えられているのは、それが私達にとって最も容易な手近かな方法であるからではないかと考えます。人格形成という意味においては、必ずしも読書という方法に依らなくとも十分に学問をすることができると思っています。語が変わりますが、私が知っている家根葺きの職人さんで——経済的には恵まれず従って旧制の中学校さえ卒業していない方ですが——非常に立派な人が居りますが、その人を想い出す毎に、自分の不徳が痛感され、非常に恥ずかしく思うことがあります。この知人の人柄は、恐らく読書によって得たものではなく、仕事を通して、すなわち身体を通して得たものだと思います。それで、常日頃考えることですが、真の意味の学問をする場合に、最も大切なことは唯単に頭で理解することではなく、自己の身体を通して理解すること、言い換えれば、単に読書によって理解するだけでなく、行為として表わすこと、或いは表わそうと努力することであると考えます。

最近、情報化時代とか知識社会とか言われ、極度に知識—ソフトサイエンス的なもの—が重要視され、それが商品化される傾向にあり、尚又新聞や雑誌等のいわゆるマスメディアの数を見ても分るように、私達の周囲には、沢山の情報が氾濫している状態で、そのような社会では、読書等の方法によって出来るだけ多くの知識の獲得が必要であることは当然であると思えます。

しかし一人の人間が、自己の周囲のありとあらゆる情報をすべて吸収消化することは到底不可能であり、私達は、どうしてもそれらの情報の中から自分にとって最も大切なもののみを取捨選択することが必要になると思われます。そうした場合、どのような規準によって選択するかということが、これからの私達にとって非常に大切な問題になり、そして、このことは、あらゆる分野において働いている人に共通の課題になると思えます。メタフィジックスという語がありますが、真の意味において科学技術の上に位する学問が、現在のような知識偏重の時代にこそ非常に大切なものになってくるのではないのでしょうか。今迄話してきましたことをすべて考え合わせますと、特に低学年の人々にとっては、第1の理由として、人間として真に自己の内面を充実させる目的で情報選択の規準を何に置くかを決定するため、第2の理由としては、遅くとも第3学年末迄には、自己

の今後の進路をどのようにしたらよいかを決定するため、第3の理由としては、今後の科学の性格として、巨大科学の語に象徴されるように、種々の科学技術の総合が必要であり、そのような意味では今後はヒューマンリレーションが非常に大きな問題になるため、更に第4の理由としては、技術者として進む場合、他の分野の人々に比較して、上に述べて来たような意味の読書をする時間を確保することが非常に困難である—このことは、私のところに来た卒業生が異口同音に話していることですが—ということから言って、今の時期に、専門に直結した読書よりは—勿論それを否定するものではありませんが—むしろ一般教養としての読書に出来るだけ多くの時間を当て、行くことが大切でないかと思えます。そして、このことは時間的に考えても低学年であればこそ可能なことではないかと思えます。

そしてこのような読書を通してこそ、将来、人類の福祉と調和を無視した科学の進歩と、科学の進歩に先行させた人類の福祉調和の両者の中、いずれを選択するかを迫られた場合に、正しい行動を取り得る人間としての技術者が生まれてくるのではないかと思えます。

工業化学科とは

工業化学科 下山田富保

新入学生諸君の清純なまなざしにあって、厳肅な思いと限りない責任の重さを感じないではおられない。これからの諸君らの船頭役をつとめて、人間に役立つ工業化学とは……、それを学ぶ必構えなどについて私のメモから概念を書きしるしてみようと思う。まず考え方をはっきりさせるために定義のようなことから始めることにしよう。

化学という学問は物質の科学といわれる。科学者 (Scientist) は森羅万象の中から観察によって知識を集め、これを有機的に整理してその中から規則性 (共通点—理論) を求め、この規則性はなぜ存在するかの疑問を発生し、一つのモデルを探してこの疑問を説明するよう試みる者である。これに対し工業化学者は化学者の基礎化学の研究の上にさらに物を生産する役割をもっていることである。すなわちいろいろな知識と既知理論の上に不確定の要素をみつけ出して化学工業技術まで育て上げなければならない。工業高等専門学校における工業化学科は化学工業技術者 (Chemical

Engineer) の高等教育養成機関なのである。

化学者は帰納的手段で化学反応の理論 (これは物理化学: Chemical Physics, Chemical Thermodynamics, Chemical Kinetics などで学ぶ) を確立したが、これを応用して物の生産に移そうとすると幾多の不確定な重要々素が含まれているので、演繹的手段では成功はおぼつかないことが多い。そこで工業化学では物理、電気、機械などの学術専門分野をも含む化学工学 (新しい化学技術を生みだすための学問という意味をもつ: Chemical Engineering) を学びとる必要があるのである。とくに電気、機械工学などの知識は諸君らの技術者としての生涯を輝かしいものにするか否かの分岐点であることを忘れてはならない。

つぎに工業化学を5年にわたり学ぶ心構えといったことについて述べてみたい。まず学校とは理論を学びつつ自分で物を考える方法として科学的アプローチ (Scientific Approach) の訓練を積み上げるところと理解してよいであろう。したがって実験室におけるよい観察者となるための訓練を受けるには、不思議なものへの強い感動、新鮮な感覚、豊かな想像力などが望まれる。高専は人間生長の最も盛んな15~18才の中学出身者を入学資格とする高等教育機関であるから最も理想的な教育ができる学校であるわけである。

私は最近「将棋と人生」という升田九段の講演を二度きく好機に恵まれた。将棋が強くなるには「読」が大切で、深く、よく読むこと。ただこれだけだというのが師匠はただの一度も教えてくれなかった。尋ねると胸にきけ、心に問え、考えてみろという。わからんから聞くといいたら、おまえは一升とつくりの中に入れるかとか、この柱の中に入れるかとか……榎問答みたいなことをいうので腹がたった。どうしても強くなりたから勉強時間をつくろうとすると奥さんからあれこれ雑用を言いつけられる。仕事の要領を上手に考えて時間をつくるとそれ以上の仕事が増えるばかりであったという。こういうなかであるとき奥さんから豆腐買いの用事を言いつかり帰る途中ころんで豆腐をつぶしてしまった。豆腐もよう買わん馬鹿たれ者と叱られてしまった。このことが一つの心の転機となって命じられたことは何んでも未熟ながら一生懸命やることに尽きると悟り、また勉強時間がなくとも師匠より強い人の試合にお茶を運んでいって見学できることに気がついたという。洗濯しながら自分ならああ指す、こう指すと自己対決できるようになり、先輩の試合も漫然と見ない、常に課題をもつことを会得し、1年で初段2年で5段になるという上達ぶりであった。これは短い期間でも精神を集中してやると上達は実に早いものであること、しかも10代で基本を学び、からだで覚え

歴史

岩波講座 世界歴史12
中世 6 岩波書店
日本庶民生活資料集成12
世相 1 三一書房

社会科学

日本教育年鑑 昭和46年版
日本教育新聞社
民俗民芸双書48
唯の伝承 岩崎美術社

自然科学

Ian N Sneddon
Fourier Transforms McGraw Hill
Philip M Morse
Vibration and Sound
Ross E McKinney
Microbiology for Sanitary Engineers
Donald Greenspan
Introduction to Partial Differential Equations
Bernard Epstein
Partial Differential Equations

生化学講座

- 1 生物物理化学 共立出版
2 生体成分 I 同
3 同 II 同
4 中間代謝の化学 I 同
5 同 II 同
6 同 III 同
7 医学の生化学 I 同
8 同 II 同
9 植物の生化学 同
10 微生物の生化学 I 同
12 遺伝・比較・発生の生化学 同
13 癌・ウイルス・放射 同
14 細胞転位の生化学 同
15 生体成分分析法 同

G・D・スミス

電算機による偏微分方程式の解法
サイエンス社

小松勇作

数学要項公式集 広川書店
フォーサイス
偏微分方程式の差分法による近似解法 上,下 西岡書店

L・E・フラー

計算機のための行列算法の基礎
サイエンス社

D・R・ローンズ

計算機実験をとりいれた初等統計
サイエンス社

ブルバキ

数学原論 集合論 1, 2, 3
東京図書

R・クーラン

数理物理学の方法 1, 2, 3, 4
同

日本化学会

化学便覧 基礎編 丸善

ジョン・C・スレイター

力学 同

宮武輝・他

モンテカルロ法 日刊工業

N・Cristescu

衝撃塑性学 コロナ社

フォーサイス

計算機のための線形計算の基礎
培風館

安達忠次

ベクトルとテンソル 同

S L Soo

Analytical Thermodynamics 丸善

工学

D C Drucker

Fracture of Solids Gordon Breach

A S Tetelman

Fracture of Structural Materials
John Wiley

土木図書館蔵書目録

第1, 2, 3, 4, 5集 土木学会

R E Smallman

Modern Physical Metallurgy
Butterworths

山田嘉昭・他

コンピュータによる構造工学講座
培風館

フローリン

フローリンの土質力学II 森北出版

ナモシニコ

工業振動学 東京図書

中村明子・他

Fortran数値計算とプログラミング
川上正光・他 共立出版

小林竜一

電子伝送回路演習 オーム社
Basic Fortran 培風館

宮崎勝

やさしいコンピュータ化の進め方
日刊工業

福田秀雄

設計のための材料力学 広川書店

国沢清典・他

オペレーションズ・リサーチ入門
同

標準電気機器講座

- 1 同期機 東京電機大学出版
2 誘導機 同
3 直流機 同
4 交流整流子機 同
5 整流器 同

同 6 変圧器 同

同 7 電動機の制御と応用 同

同 8 電力コンデンサ 同

同 9 シャ断器・避雷器 同

同 10 配電盤・制御機器 同

板倉忠三

グース・アスファルト舗装 理工図書
テルツァギ・ベック

土質力学 基礎・応用編 丸善

化学工学会

プロセス機器 同

構造設計シリーズ

2 塔槽類 同

3 配管 同

4 加熱炉 同

建築構造大系7

構造実験計画 彰国社

芸術

原色日本の美術24

風俗画と浮世絵師 小学館

浮世絵

7 美人画II 毎日新聞社

11 役者画I 同

日本絵画館2

奈良・平安編 講談社

世界の美術館35

フリーア美術館 同

語学

L G Alexander

Fluency in English London

高橋正武

西和辞典 白水社

新村出・編

広辞苑 第2版 岩波書店

L G Alexander

Practice and Progress London

文学

明治文学全集68

徳田秋声集 筑摩書房

現代日本文学大系1

政治小説・坪内逍遙・二葉亭四迷 同

日本近代文学大系17

与謝野晶子・若山牧水・窪田空穂集 角川書店

貴重古典籍叢刊4

新撰寛政波巻 同

田辺貞之助

古川柳風俗事典 青蛙房

清崎敏郎

俳諧と民俗学 岩崎美術社